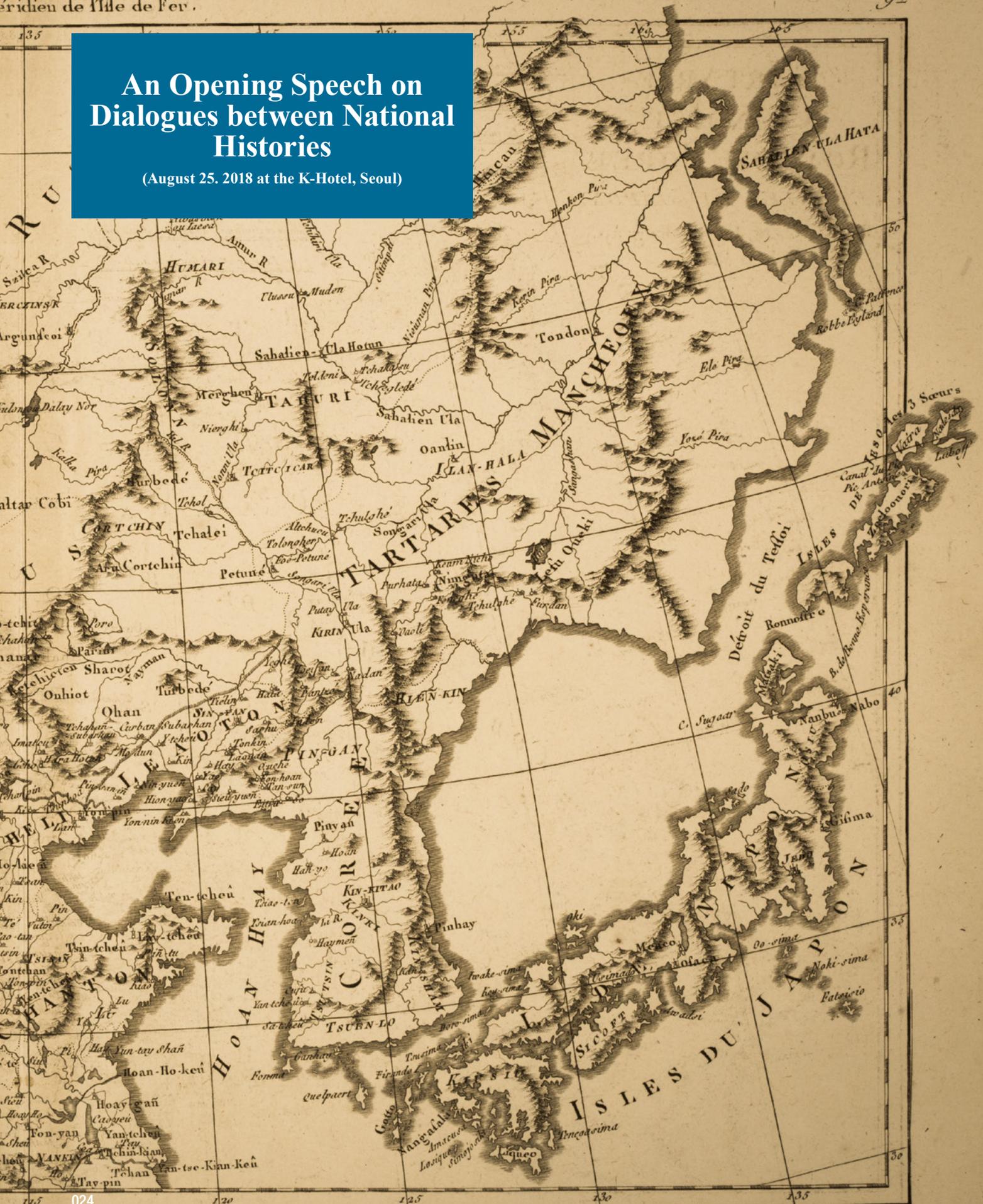


An Opening Speech on Dialogues between National Histories

(August 25, 2018 at the K-Hotel, Seoul)





和解に向けた歴史家ネットワークのために For the Network of Historians towards Reconciliation

劉傑（早稲田大学教授）
Liu Jie (Professor, Waseda University)

(円卓会議「国史たちの対話」における「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」セッションの開幕スピーチ)
(Introductory speech for the session “Examining the network of historians towards reconciliation” in the roundtable “Dialogues between national histories”)

今回は円卓会議「国史たちの対話」の3回目となります。テーマは17世紀の東アジア国際関係ですが、対話の最後に「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」というセッションを設けることにいたしました。これは今までの対話を総括し、今後の対話に向けた問題提起を意図したものです。

ご承知の通り、今までの20年にわたり、日、中、韓3カ国のあいだでは、多様な形の歴史対話が展開されてきました。これらの対話はどのような成果を収めたのか、どのような問題を積み残したのか、さらに、むしろ対話によって新たにどのような問題を作り出してしまったのか。いよいよ検証しなければならない時期に来ているのではないかと強く感じています。

これまでの歴史共同研究を振り返ってみますと、まず、国家間の、政府が主導した歴史共同研究がありました。日本と中国、日本と韓国の間で行われました。それぞれ不完全ながら、成果を出版し、各国の社会に一定の影響を与えました。また、民間レベルでは近代史をめぐる歴史対話、共同研究、若手研究者を中心とした共同研究などが行われてきました。東アジア国際関係の激しい変化に翻弄されながらも、歴史家たちは執拗に対話のチャンネルを維持し、

拡大してきました。しかし、多様な歴史共同研究の相互関係や、社会への発信とその影響、とりわけ、国民同士の相互理解に与えた影響について、一度丁寧に検証する必要があるのではないかと思います。本日の「和解」のセッションで、このようなことを議論できればと期待しています。

さて早稲田大学は浅野豊美先生を代表にして「和解学の創成」というテーマで科研費を申請しました。2017年から5年間の計画で研究が進められています。この研究を簡単に説明すれば、「和解学」というものを東アジアの「共有知」として、生み出すことができるかどうか、という試みです。私はこの中で「歴史家ネットワークの検証」というグループを担当しています。国民同士の和解は長期的な課題です。歴史家が国民同士の「和解」にどのようにコミットしていくのかということも難しい問題です。ただ、和解と和平が東アジアの重要なテーマであるならば、歴史対話もそれを意識したものであることは言うまでもありません。

さて、「国史たちの対話」の着地点、すなわち、最終的な目的をどこに設定すればよいのでしょうか。このことは、先に紹介しました「歴史家ネットワークの検証」の目的と重なる部分もあります。いまのところ3つのことを考えております。

1つ目は、各国の歴史認識に影響を与える要素として、どのようなことが考えられるのか、ということについて一応のイメージ図を描き出すことです。そこには、各国の社会変動、歴史教育のあり方、国際関係の影響など、さまざまなファクターが考えられますが、特に注目したいことは、歴史認識の問題は、まずそれぞれの国の国内問題であるという点です。国内問題としての歴史認識問題が各国に横たわっています。つまりそれぞれの国の内部にある多様な歴史認識が対立しているなか、どのような形で国境を越えて対話をするのか。歴史認識問題は、国内と国際という複雑な構造になっています。各国の歴史家がそれぞれの国内要素にどう影響されながら、国際研究に臨んでいるのか、この点を明らかにする必要があります。

2つ目は、今までの歴史対話の歴史を検証し、総括することです。そのために、3つの時期に分けて考えることができるのではないかと思います。第1期は1970年代以前の歴史対話です。それはいわゆる「戦後歴史家」たちの対話です。この時期の対話の多くは、直接対話ではなく、論文などの研究成果を通しての対話です。例えば、日本の戦後歴史学界の研究状況は70年代以前の中国におけるアジア史、日本史、中国史研究に強い影響を与えました。その実態の検証はほとんど行われてきませんでした。つまり、国交のない国々間の知的交流のあり方をもう一度考え直す必要があると思います。第2の時期は1980年代です。これは中国が大きく変わり始めた時期です。歴史家たちの

直接対話はいろいろな形で展開されました。当時はいわゆる歴史認識にめぐる対立というより、「アジアの近代化」の問題が大きな焦点となっていました。そのときの対話の成果、あるいはその遺産をどのように受け継いだらいいのか、この問題は残さずままです。そして第3の時期は1990年代、とくに90年代半ば以降の時期です。この時期の対話は、まさに歴史認識のズレをいかに克服するのかわかというテーマに展開されました。ただし、この時期の対話は政治的な対立や、社会的な対立を背景に展開されたものです。歴史家たちは大きな荷物を背負って対話しました。今、われわれが取り組んでいる「国史たちの対話」はまさにこのような背景のなかで行われています。冷静に考えれば、この時期の対話は問題を発見しただけではなく、新たな問題を作り出しているのかも知れません。

そして3つ目は、多様な歴史対話の主体の検証です。私に関わってきた歴史対話のかなりの部分は「越境する歴史家たちによる対話」です。とくに1980年代以降、中国の歴史研究者が大量に海外に出て成果を発表しています。彼らは主にアメリカや日本、あるいはヨーロッパで活躍しています。彼らは国境を越えて歴史対話に加わっています。日本の研究者もこのような問題意識を持って海外で対話に参加している方が多いと思います。韓国の研究者も同様です。この越境する歴史家たちが参加する対話がどのように発信され、それぞれの国の歴史認識にどのような影響を及ぼしたのか、非常に興味深いテーマです。

以上の問題意識を踏まえて、今回の「和解」のセッションは、今までの歴史対話の経験を踏まえて、対話のなかで何が生まれたのか、あるいは問題点として何が残されたのかを、まず明らかにすることを目的にしたいと思います。同時に、根本的な問題ではありますが、いったい歴史学および歴史家は、歴史の和解、国家と国家の和解にいかに関わっていけばよいのか、「和解のための歴史学」の可能性と限界はどこにあるのか、ということも念頭に置きたいと思います。

現在、歴史学をめぐる「史料」のあり方が大きく変化しています。また、歴史問題の議論に参加する人の構成も一変しました。歴史学と歴史家は大きなチャレンジに直面しています。1つはオーラルヒストリーや記憶の問題です。これらの要素が歴史史料として登場したとき、伝統的な歴史学の研究方法では対応しきれないような問題が発生し

Summary: The geopolitical dynamism in East Asia today urges us to reach a historic reconciliation between its key players, namely China, Korea and Japan. The modern history in this region is mired in recurring political and often violent conflicts, and the narratives in these nation states have been dominated by their unique "national histories." Japan has its Japanese history. China has its Chinese history. Korea has its Korean history. But there is no cross-border narrative of regional history that can be shared and honored by all the people in this region. That's why we, the historians in East Asia, need to engage in constructive, bilateral and multilateral dialogues to make the historic reconciliation come true. We, in cooperation with Waseda University's "Reconciliation Studies" project, encourage everyone to join our discussions.

ます。また、多様な史料がいまインターネットで公開され、国境を越えて、誰でもアクセスできるようになり、誰でも歴史について簡単に発信することができるようになりました。歴史像の複雑化が、歴史学に大きな課題を突き付けています。時代はあるいは「新史学」の創成を求めているのかも知れません。その新史学のイメージはまだ定かではありませんが、ひとつ言えることは、「国境を越えた歴史学」ではないかと思います。

「国史たちの対話」は3回目ではありますが、4回、5回以降は19世紀、20世紀など近現代がテーマです。着地点に少しでも近づけるように、より問題意識を鮮明にしていく必要があるのではないかと思います。今回のセッションが、そのための一つの準備運動になればいいと思います。

